

中国化学会との協力関係樹立

はじめに

3月28日から6日間、中国化学会（表1）から王基銘団長以下18名が来日した。その間、日本化学会と中国化学会との国際協力協定の調印、89春季年会への参加、アジアシンポジウムでの講演、東京大学や企業への訪問、化学会館での討議などを行った。日本化学会関連のトピックスを報告する。

表1 中国化学会概要

創立年：1932年
主旨：①化学と化学技術の普及、繁栄及び成長を促進し、社会人の科学的教養を向上させ、人材の育成を促進し、国民経済における化学の役割を果たすこと ②国民経済の持続的成長の促進に寄与し、中国の化学が世界の最先端に肩を並べるよう弛まない努力を払うこと
会員数：約5万人
主な役員： 白春礼理事長（中国共産党中央委員） 王基銘副理事長（前 SINOPEC 総裁）

日本化学会と中国化学会との国際協力協定調印の背景と内容

日本化学会は、2008年度において、①「化学の意義」を広く社会にアピールすること、②人材の育成に寄与すること、③国際的な連携、特に「アジア諸国との連携」を強化することに力を注いできた。アジア諸国との連携を強め、切磋琢磨しながらともに世界の化学を引っ張っていくための基盤作りを目指す中で、その第一弾として、2008年9月、中西会長、岩澤康裕副会長（当時）らが訪中、白理



写真1 調印を終えて

事長、王副理事長と会談し、国際協力協定を締結することで基本合意に至った。

協定の目的は、日本と中国が、化学に関する科学者と技術者の交流を促進し、両国並びに世界における化学と化学技術の発展に貢献することである。具体的な内容は、①日中の化学会年会へ相互に招待すること、②両学会への入会、年会・シンポジウムなどへ相互参加する場合の優遇措置、③出版物の交換、④合同シンポジウムの定期的開催、⑤会長の相互訪問、などである。今回の来日の目的の一つは、協定書の調印式を行うこと、そして具体的なアクションを両者で討議することである。

調印式

調印式は、春季年会が開催されていた日本大学理工学部船橋キャンパスで3月28日に行われた。中国化学会訪日団18名の皆さんは、中国各地の大学や研究機関で勤務しておられるが、前日全員が中国全土から北京に集合しての来日となった。

13号館特別会議室の中央に調印用のテーブルを置き、中西会長と王副理事長の調印を日中の参加者全員が見守るという形で、和やかな雰囲気のもとに調印式が行われた（写真1）。調印式の模様は、化学工業日報（3月31日付）の一面トップで報道されている。

訪日団一行は、調印式後、春季年会開催中、アジアシンポジウムでの講演、懇親会への出席など、イベントに積極的に参加し、両化学会間並びに会員間の交流を深めた。

日本化学会と中国化学会の討議

3月31日、春季年会が終了した翌日、中国化学会訪日団の皆さんが、化学会館を訪問した（写真2）。調印した協定書に基づいて具体的なアクションを討議するための第1回会議である。日本化学会から、中西会長、澤田肇頭副会長、岩澤次期会長、太田常務理事、事務局関係者が出席した。討議を通して、できること



写真2 中西会長と王副理事長

から速やかにアクションを開始しつつ、議論を継続することを両者で合意した。その詳細は以下のとおりである。

①年会へ相互に招待することと、②入会、年会・シンポジウムなどへ相互参加する場合の優遇措置については、両者は、年会・会議・シンポジウムの日程を事前に紹介することにより、人と情報の交流を促進することを確認した（今後、会員から中国化学会に知らせたい会議の日程がありましたら、事務局まで連絡下さい）。③出版物の交換は、日本化学会が発行する雑誌、「化学と工業」、「化学と教育」、「B.C.S.J.」、「Chem.Lett.」を送付することになった。出版に関する討議の中で、中国化学会から、日本以外からどの程度の投稿があるか（答え：Chem.Lett.誌で約55%）、投稿の多い外国はどこか（答え：同中国が1位）、投稿者がオープンアクセスを選択する割合はどの程度か（答え：約5%）など質問が相次ぎ、中国から日本化学会の出版に対する関心の高さを感じた。

また、④合同シンポジウムについて、率直な討議を行い、多数のシンポジウムが存在する中で、新たに一般的なシンポジウムを開始することは魅力がないとの認識で一致した。一方、次世代の化学者が特定のテーマのもとに少人数でワークショップを行うことは、お互いの理解を深め、個人的な関係を築くために重要で



写真3 干杯

あることから、例えば、1、2年に一度、このようなワークショップをお互いの年会において開催するという意見が出され、今後両者で具体案を検討することになった。⑤会長の相互訪問は、年会に限らず機会があるときに相互訪問することで合意した。中国化学会より、アモイ大学で開催される2010年度年会に現会長を含めたトップ訪問の要請があった。

最後に、王副理事長より、本年9月に上海で開催されるAsian Chemical Congress (ACC)へ多数の日本化学会会員の参加要請があった。また、2013年のACCを日本に招致したいという日本化学会の考えに対して、白春礼理事長がサポートすると表明され、中西会長が謝意を示した。

2時間半にわたる討議の後、化学会館近くの中華料理店に席を移し、懇親会を行った。藤嶋前会長、東京大学訪問でお世話いただいた塩谷先生も同席いただいた。今回の訪日団に、欧米や、藤嶋先生、

岩澤先生の研究室をはじめ日本への留学経験者が多数おられ、英語、日本語、中国語が飛び交う楽しい会になった（写真3）。

おわりに

経済・文化における日中交流は進んでおり、化学技術においても大学間や日本企業と中国の中国科学院・大学の協力関係はあるが、学会同士の協力関係の樹立は今回が初めてであった。中西会長は、「学会の国際交流の第一歩。様々な層で人と知識の流れを太くすることによって、世界特にアジアにおける化学研究及び技術の進展に期待している」と述べている。

これまでの先輩方が築いてこられた中国化学会との信頼関係をベースとして、今回の滞在期間中に培った人間関係を生かし、お互いにとって良いものにしていきたい。討議の中で合意したように、できることから一つひとつ着実に実行していくことが大事だと思う。今後、FACS（アジア化学会連合）などにも積極的にかかわっていくとともに、アジア各国化学会との連携を強めていきたい。

受け入れにあたり、ご尽力・奔走いただいた先生方、関係者の皆様に心よりお礼申し上げたい。

〔川島信之（常務理事補佐兼事務局長代行）〕

©2009 The Chemical Society of Japan